

「天国への道」

聖書の箇所：ヨハネ福音書 14：1～6

<導 入>

詩人の竹内浩三さんが、今から約100年前に次のような詩を書いておられました。彼は、23歳の若さでフィリピンのルソン島で戦死しました。「日本よ オレの国よ オレにはお前が見えない」。今、日本はコロナウイルスの感染のため、これからどうなっていくのか、先が見えないところに立っています。多くの人々の口から出るのは「これからどうなっていくのか不安です」という言葉です。ワクチンの接種が始まっていますが、コロナウイルスの感染がいつ収束するのかまったく見えない状況です。先の見通しが立たないのは、不安な思いを起こさせます。イエスの弟子たちも、不安な思いを体験しました。そのような不安な思いを持っていた弟子たちに対して、イエスがどのような励ましを与えられたのかを見ていきましょう。

I. 心騒ぐ

▽ヨハネ14：1 イエスは、弟子たちにこのように語りかけました。イエスはこの前に、弟子たちの足を洗われ、模範を示されました。それとともに十字架にかかって死なれ、彼らと別れることを語られました。「わたしが行くところに、あなたがたは来ることができません」と言われました（ヨハネ13：33）。イエスは、イスカリオテ・ユダが彼を裏切ることを指摘され、彼は立ち去りました。さらにイエスは、ペテロが彼を否認することも予告されました。今まで一緒にイエスにつき従ってきた、愛するメンバーが離れていくことは、とても寂しく、心細かったです。ましてや彼らを導かれた師であるイエスについて行けないとは、弟子たちはどれほど不安な思いをしたことでしょうか。弟子たちはそれまでの生活を捨てて、その生涯をイエスについて行くことと決意した人たちでした。彼らは、イエスにすべてをかけていました。そのようなイエスがいなくなることは、彼らにとっては全くお先真っ暗で、誰について行けばよいのか心は混乱していました。榎本先生の体験です。“私が戦争に行って、野戦病院にいたとき、すでに終戦の日8月15日を過ぎていました。そのような時、一人の兵隊が戦争に負けるのは大変なことだ、皆殺しになるかもわからないという話をしました。その話が終わると騒然となり、病院は混乱に陥りました。それは不安のためでした。国あつての軍隊であり、軍隊あつての自分でした。その国が負けたのですから、軍隊も自分もなくなり、よりどころがなくなるという経験をされました。”弟子たちはそれ以上であつたと思われまふ。弟子たちが心騒いでいるのを知っておられたイエスは、彼らを励まし、慰めるために語られました。

▽「あなたがたは心を騒がしてはなりません。神を信じ、またわたしを信じなさい」と語られました。後半の箇所は、命令形ではなく、「あなたがたは神を信じ、またわたしを信じています」と訳されている聖書もあります。弟子たちは、すでに神様への信仰をもち、イエスに従っていました。ここでイエスが言われたのは、神様とイエスにより頼むならば、心騒ぐのがやわらぐということです。不安な時こそ、また心配や恐れに襲われた時こそ、神様により頼むのです。詩篇141：8「身を避けています」という言葉は、「より頼みます」とも訳されています。弟子たちは、イエスがどうして去っていかなければならないのか理解でき

ませんでした。私たちも、どうしてあのようなことが起こったのか理解できないことを体験します。どうしてあの人があのような病気になるのか、また地震などの自然災害でどうして命を落とさなくてはならなかったのかと思います。それは耐えられないことです。しかし、「私たちすべてのために、ご自分の御子さえも惜しむことなく死に渡された神が、どうして、御子とともにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがあるのでしょうか」（ローマ8：32）という神様の愛の前で、その苦しみを少しずつ受け入れるようになるのかもしれない。このことは、大変難しいことです。人生の嵐の中で、神様の愛にのみ、一条の光を見出せることでしょう。

II. 天国の約束

▽ヨハネ14：2、3 心騒がせている弟子たちを励まされたイエスは、神様を信じているならば「望み」があることを語られました。「わたしの父の家」とは、神様がおられる天国です。「住む所」とは、原語から言えば「部屋」という意味があります。天国という家には、たくさんの「部屋」があります。その部屋がいっぱいになることはありません。3節では、「また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます」と約束されました。ここで、「イエスはもう一度来る」と約束されました。イエスの再臨についての非常にはっきりとした言及です。イエスの再臨については、クリスチャンの態度は大きく二つに分かれるようです。一つは、イエスの再臨は将来に起こり、いつ起こるかかわからないので、あまり関心を示さない態度です。確かに、再臨の時期やその時に何が起こるのかはわからない所もありますが、イエスが再臨されることはイエスの約束です。イエスが語られたことは神様の約束ですから、必ず実現します。もう一つの態度は、イエスの再臨を強調するあまり、人々の行動をあおってしまいます。イエスはいつ再臨されるのか、どのように再臨されるのかは、聖書に明確に述べられていないのにもかかわらず、議論します。聖書の解釈という人の知恵で知ろうとします。それは、知的な満足を与えるに過ぎません。大切なことは、「あなたがたをわたしのもとに迎えます」という約束です。天国では、イエスが私たちを喜んで迎えてくださいます。この喜びのために、この地上でどのような苦しいことを体験したとしても、イエスを信じ続けるのです。弟子たちは、イエスと一時別れなければなりません。しかし、もう一度弟子たちはイエスに会い、父の家で永遠に過ごす約束が与えられています。それは、人類歴史の完成の時であり、キリストの勝利が確定する時です。Iコリント15章で、パウロはキリストの復活と私たちのからだの復活について語りました。私たちは、朽ちないからだに変えられると言いました。私は、この一週間「朽ちないからだ」について考えてきました。そして、この約束はとてつもなく栄光に満ちたものであると教えられました。この地上を去ってからイエスの再臨があれば、復活して朽ちないからだに変えられます。生きている時にイエスの再臨があれば、死を通過しないで、朽ちないからだに変えられます。イエスが栄光のからだをもっておられるのですから、私たちも朽ちない、栄光のからだに変えられなければ会うことはできません。なによりも喜ばしいのは、イエスとともに永遠にいることです。3節「わたしがいるところに、あなたがたもいるようにするためです」とあります。このことが最も求めるべきことです。もはや私たちをイエスから引き離すものは何もありません。

III. 天国への道

▽ヨハネ14：4～6 イエスは、弟子たちにご自分がどこへ行こうとされているのかをしばしば語られました。イエスは、4節「わたしがどこに行くのか、その道をあなたがたは知っています」と言われました。それは十字架から復活、そして天国への道でした。しかし、

弟子たちは、イエスが行こうとする道を理解していませんでした。5節で、トマスは、正直にイエスに尋ねました。トマスはわからないものをわかったというようにあいまいにすることができない人でした。あたかも信仰深い状態で満足することができませんでした。彼には、確信が欲しかったのです。私たちも信仰においてあいまいにすることなく、確信を持ちたいものです。この誠実な弟子であったトマスの質問に対して、イエスは非常に大切な神様の真理を語られました。

6節「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです」。まず、イエスは道であると言われました。私は、この道は人が生きる道であると思っていました。そういう理解も間違っていないのですが、この前にイエスが弟子たちに「天国」のことを語っておられたことからすれば、この「道」は、天国への道です。では、この道にはどういう意味があるのでしょうか。私たちが知らない町へ行って、道を案内してくれる人を探します。その人は目的地に行くには「最初の信号を右に曲がり、次の信号を左に曲がります。そして広場を横切って、教会の前を通り過ぎて、左側の四番目の路地を入った所が、目的の場所です」と言われたとしましょう。その人が言われた言葉に従ってその通りに行こうとしても、目的地に着けるかどうかわかりません。しかし、もし道を尋ねられた人が「わたしが案内しましょう」と言って、実際にそこまで一緒に同行して案内して下されば、道に迷うことなく、目的地に着けます。これが、イエスが私たちのためにしてくださったことです。イエスは、天国のことや天国に行くためにはどうすればよいのかを語られただけでなく、私たちを天国に導くために、ともに歩まれるのです。そういう意味で、イエスは道です。イエスは十字架の死と復活を通して、天国の道を開かれただけでなく、私たちとともに歩み、天国まで導き、案内して下さいます。

イエスは、「わたしは真理です」とも言われました。イエスが言われた「真理」とは科学的な真理ではなく、天国に関する真理です。天国を知っている人はこの地上では誰もいません。目的地である天国を知ろうとすれば、イエスご自身を知れば十分です。天国への道は十字架と復活の道ですから、誰もその道について教え、またその道を歩んだ人はいません。イエスご自身を知ることによって、天国への道ははっきり見えてきます。

イエスは「わたしはいのちなのです」とも言われました。私たちにとって、いのちはすべてです。いのちがなくなれば、私たちの人生もありません。イエスは、私たちのいのちであり、すべてです。イエスは、黙示録にありますように「わたしは死んだが、見よ、世々限りなく生きている」(黙示録1：18)お方です。ですから、イエスのいのちは永遠のいのちです。イエスを信じる者は、天国において朽ちない永遠のいのちを持っています。天国への道は、永遠のいのちを目指す道であり、その人生は価値ある人生です。

イエスは、天国への道に関して、天国への案内人とその道を歩む価値と、到着地を語られました。たとえ、弟子たちがイエスと離れ離れになろうとも、必ず天国で出会う望みがあるので、天国を目指す信仰の道を進んでほしいと励まされました。イエスは、私たちにも同じ励ましを語っておられます。

「わたしを通してでなければ、だれも父のみもとに行くことはできません」と、イエスは言われました。この言葉は、キリスト教の独善の言葉ではなく、他の宗教を攻撃したり、排斥するものではありません。天国は神様のみもとであり、イエスがおられる永遠の世界です。その世界にイエスを認めないで入ることはできません。神様は、イエスを信じる者を永遠の天国に迎えようと待っておられます。ジョン・バンヤンの「天路歷程」の最後は、次のように記されています。「さて、私は夢の中で、これら二人のクリスチャンが門を入れて行くのを見た。するとどうだろう、彼らが入るとともに、その姿は変わり、黄金のように輝く衣を着せられた。そこには、豎琴と冠をもって二人を迎える者がいた。すると、私は夢の中で都の中のすべての鐘が喜びをもって鳴るのを聞いた。そうして二人に向かって言う者があった『汝の主人の歓びに入れ』」。私たちも、この天国を目指して歩みましょう。